（石田氏は、はっきりと「地御前神社祭」を「御陵衣祭」ではなく、「御霊会」と記されていることを指摘しておられます。石田氏がどのような文献から、この字を使用されたかは分かりかねますが、「ごりょうえさい」の元々の字は、この「御霊会」祭ではなかったか。と、考えられる点が、二点ございます。）と記され御陵衣祭に奏上される祝詞と、そして内宮厳島神社の社人の方達と神馬すなわち白馬について資料等お寄せいただきました。

四、奏上される「祝詞」と、道を浄める「白馬」

石田米孝先生の書物に述べられたように、「五月五日の節句は御霊会といい、平安初期ごろから、個人や社会に祟り、災いをもたらす死者の怨霊を鎮めるための祭りで、京都の祇園祭にその典型を見ます。農村社会にも広がり、各種の夏季の民俗行事や民俗芸能を生みますが、この地御前の場合は厳島神社外宮の行事が地御前で行われるということであって、農民それ自体の行事ではないと言えます。」

さらに、厳島図絵に六頁にわたって描かれた五月五日祭について、そのころの祭のにぎやかな様子を述べておられ、「この外宮の行事には、この地方全体がかかわり、それ故に参観者も多かったのだと思います。」とあります。

地御前神社で挙行された、祭式・舞楽・流鏑馬神につきましては、前にも会報の中に記述していましたので、今回は略しますが、社務所の方から提供していただいた資料等の中から、最も貴重な意味合いを明らかにしていただいた「祝詞」（のりと）につきましては、「百姓が、取り作らん、五穀は、草の片葉に到る迄、悪しき風、荒き水に合わせたまわず」と、申し上げ「八束穂の茂穂に成り幸え給え」と、稲や作物の豊穣を祈念する点です。

ここで言う「悪しき風、荒き水」をもたらす悪霊を鎮め祓う為に、この祭があったのではないか。

ーご回答　引用の四ー

私は、御陵衣祭で奏上される野坂元良宮司さんの威厳のある祝詞を、敬虔な気持ちで拝聴させていただきながら拝殿にぬかづいていたことを思い出し「祝詞」の内容がわかったことを、心から有り難く思っています。

御陵衣祭のことを、十分にわからないまま、また、調べも十分にしないままで、拝観していたことを申しわけなく思ったことでした。

続いて、「厳島図会」に描かれた神馬のことですが、前号（さんらお123号）に書きました文の中で、御陵衣祭当日の午前中に、今市稲荷社まで白馬をひいて旧道を行く様子を、写真と共に記載したことと関わりがあります。

道を浄める「白馬」①

この白馬（神馬）は、流鏑馬の時に使用される馬でないことは、地御前神社の境内で見て分かったのですが、「芸藩通志」巻十七に「神馬　常に、神厩に繋ぎかひ　神遊の時、儀伏に入る。昔より、黒毛・栗毛など、その他異色の馬を献納するとも、次第に毛をかへて白くなり、十二年の間には、必純白となる。亦あやし。」――宮島の七不思議のひとつ――

他にも神馬に関する記述は、「続日本記」「棚守房顕覚書」「龍一神社と伝説」等にあり、中でも、目をひくのは、

「龍馬は青色の変化した白馬とされ……とあり、日本でも平安時代には、白馬の節会をアオウマノセチエ等と呼んでいる。」とあります。（略）

「中国では、白馬は龍の仮の姿と信じられていたことや、「アオウマノセチエ」は中国伝来の宮廷行事で、この日に青馬（白馬）を見ると、年中の邪気が拂われると考えられていたこと。」も引用

榊を立て御幣・紙垂を飾る②